藤井博理事を偲ぶ



公益財団法人藤井博理事（九州大学名誉教授）は平成28年１月16日、突如、急性A型大動脈解離を発症され、緊急手術が施されました。しかし、その甲斐なく、併発された脳梗塞のため、1月26日19時に急逝されました（享年74歳）。

藤井先生は京都工芸繊維大学繊維学部をご卒業後、九州大学大学院農学研究科修士課程に進まれ、昭和44年に修了された後、九州大学農学部助手に着任されました。昭和51年に農学博士の学位を取得され、一貫して九州大学農学部附属家蚕遺伝子実験施設（現九州大学大学院農学研究院附属遺伝子資源開発研究センター）で蚕の遺伝子保存に関する研究に携われました。特に、哺乳動物、小動物、微生物、植物の遺伝資源の収集、系統保存、提供などを行う国家的事業・ナショナルバイオリソースプロジェクト（カイコ）の中核的プログラム代表者として事業開始当初（平成14年）から退職されるまで5年間務められました。また、国際学術交流も積極的に推進され、中国・西南大学とは、学術交流協定を結び活発な研究・人的交流を図られました。その成果は､現在の両大学で行われているカイコ遺伝子資源保護の共同事業となり、実を結んでいます。これらのご功績により、中華人民共和国外務省より「友誼賞」および中国重慶市人民政府から「三峡友誼賞」を授与されています。学術研究面では、450系統の変態期における蚕体液キモトリプシンインヒビタ－を遺伝生化学的に追求され、変態期の生理機能として生体防御、貯蔵蛋白質の分解、組織崩壊に関与することを明らかにされ、「家蚕キモトリプシンインヒビタ－に関する遺伝生化学的研究」に対し日本蚕糸学会より平成14年蚕糸学賞を受賞されました。このような多忙の中、母校京都工芸繊維大学の非常勤講師として特別講義を担当されたり、ご退職後も福岡女子短期大学で教鞭をとり、動物学の講義を通して生命の尊さを語られ、他大学においても後進の指導に情熱を注がれました。

当財団では、「繊維学およびその基礎科学領域の教育及び普及」を核とする公益事業を展開しています。上記のように故人は蚕の系統保存、またそれを基盤とした遺伝生化学の権威者として活躍されてこられたことから、この領域での研究教育助言及び学述普及活動の推進をお願いし、平成22年から理事にご就任頂きました。

当時、故人は京都工芸繊維大学とJAXAが共同で蚕卵を国際宇宙ステーションへ搭載し、宇宙放射線影響を観る実験において突然変異の検出を担当されていました。そして、当財団もこの研究事業に参画し、宇宙から帰還した蚕卵を全国の小・中学校や博物館に無償配布することによって宇宙カイコを通し青少年への生物教育に貢献しました。故人は、全国各校から送られてきた小・中学生のレポートを楽しく読みながら、「生命」の尊さを語るとともに、青少年期での生物教育の重要性を指摘され、この事業実施の意義を強く強調されていました。この事業を契機に、蚕を材料とする生物教育を提案され、実施に移されています。また、蚕の系統保存に関する生化学的研究や繊維科学に関する啓蒙的書籍編集、発刊に尽力され、特に当財団発刊の「虫たちが語る生物学の未来」（平成21年出版）に当たり、多数の研究仲間に執筆を依頼して頂きました。また、繊維科学シリーズ「蚕サイエンスの進展」（平成27年出版）では、古典遺伝学から遺伝子工学までの幅広い視点から校閲され、この書籍編集にご尽力されました。ご生前のこれら多大なご貢献に厚くお礼申し上げます。

故人は、幼少期より「虫」を愛し、「花」を育て、温厚で大らかな心を育んでこられました。ソフトで暖かい人柄は多くの研究者仲間や学生から慕われていたのでしょう。「先生とのお別れの会」に東京や信州をはじめ遠くから参列され、遺影をじっと眺めておられました。また、お若い頃のご家族や学生たちと団欒されているお姿がスクリーンに映し出された時、ご生前の想い出が蘇り、参列者のほとんどが涙を浮かべておられました。微笑んだ故人の遺影は、「生命」について、昆虫の変態期の組織崩壊・新生について語り掛け、当財団の将来像についても語られているようです。

笑みを浮かべながら当財団に訪れる藤井博先生にはもう会えません。

謹んで心より哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

